

アフターコロナに向けた地域交通の「リ・デザイン」有識者検討会 議論いただきたい事項について

令和4年5月10日(火)



公共交通利用促進ゆるキャラ
のりたろう

本日の検討会で議論いただきたい事項について

第1回、第2回の検討会でのご意見

- 地域のモビリティに唯一解はない。移動ニーズの小口化・多様化が進んでいる。オンデマンドバスを導入してルート最適化を図っても、毎日の通勤・通学や遠方からの観光には向かない。移動シーンに応じたサービスが必要である。
- 若い人が移動手段に困っているという声を聞くようになった。子育て世代になれば送迎に自家用自動車を使用せざるを得ないという意識があり、それでは人生設計が難しいので、居住地の選択において公共交通の充実を重視する傾向が徐々に表れている。
- 乗ることが苦痛にならない、住民目線で誇れる交通サービスを提供する必要がある。
- 交通事業者同士、競争して共倒れしないように、モードに捉われずに協調して需要を増やす取組を始めている例がある。

交通事業者相互間の共創に係る論点

<総論>

- バス事業者間だけでなく、並走する鉄道とバスにおける運賃共通化、ダイヤ連携など、**モードに捉われず移動サービスを一体的にとらえて確保・充実するため、必要なアプローチは何か。**

<各論>

- **事業者間で共創を進めていくメリットは何か。**また、共創を通じてそれぞれが持続性を高め、共存していくための課題は何か。
- **競争していた事業者同士が共創に取り組むきっかけは何か。**意識を変えていく上で重要となるのは何か。
- こうした取組を進めるに当たって、**制度上の課題**は何か。また、**地域や行政はどのように応援すべきか。**

他分野を含めた共創に係る論点

<総論>

- **交通事業者が暮らしに関わる地元の企業等と適切にリスク分担し、ノウハウを発揮しつつ、既存の枠組みとは異なる方法で交通を創出するため、必要なアプローチは何か。**

<各論>

- 単にデジタル技術で実証運行するのではなく、**真に使いやすいサービスとして応援され、自走するための課題**は何か。
- 医療や教育など**地域の暮らしに関わる他産業と連携する上でのハードル**は何か。
- こうした取組を進めるに当たって、**制度上の課題**は何か。また、**地域や行政はどのように応援すべきか。**

<本日のヒアリング内容>

- ・ **JR九州、西鉄、第一交通産業**：九州の交通事業者が連携したモビリティサービスの取り組みについて
- ・ **三豊市**：行きたいときに行きたいところへ行けるまち（地域に必要な交通を住民主体で再構築する取組について）
- ・ **WILLER**：WILLERの目指す地域交通について
- ・ **前橋市**：「ぐんま共創交通」について
- ・ **日本銀行**：共創におけるプロジェクトファイナンスの可能性や金融機関の役割について

モードの垣根を超えた交通サービスの展開について

○ 並走する鉄道とバスにおける運賃の共通化、ダイヤの連携など、**モードに捉われず移動サービスを一体的にとらえて確保・充実していくためのアプローチを検討**する。

例：徳島県南部における共同経営計画（令和4年3月認可）

取組の背景

J R 牟岐線の運行本数が少ない阿南駅以南における公共交通利用者の利便性を確保するため、徳島バスの運行する**高速バス**について、**鉄道と並行して一般道を運行する一部区間において、途中乗降を可能としているところ。**

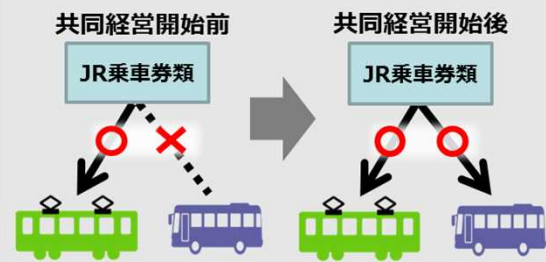
共同経営の内容 共通運賃・通し運賃の設定及び収入調整

徳島県南部（阿南駅以南）の地域間移動の利便性向上を図るため、**独占禁止法特例法に基づく国土交通大臣の認可により、J R 牟岐線に並行して運行する徳島バスの J R 乗車券類による利用を実現。**

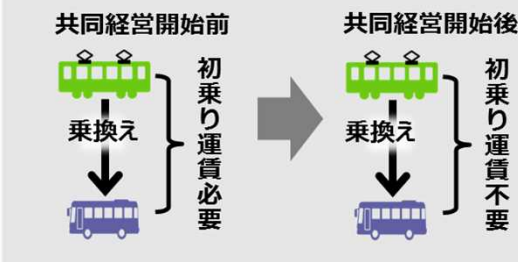
- J R 乗車券類でバスを利用可能とするほか、**初乗り運賃が不要**となる。
- J R 乗車券類による徳島バス「室戸・生見・阿南大阪線」利用時の収益は 1 : 1 で分配することとし、**運賃プール**を行うJR四国から徳島バスに配分。
- ・ 区 間 ：阿南～浅川

<取組イメージ>

① JR乗車券類で徳島バス利用を可能化



② 通し運賃の適用



取組の効果 利便性の向上及び経営力の強化

- 徳島県南部地域の**平均運行間隔時間が20分以上短縮**される。
- 利便性向上に伴う利用者増等により、**交通事業者の経営力が強化**される。



○ くらしに関わる地元の企業や住民と適切にリスクを分担し、交通事業者が移動サービスの運営・運行においてノウハウを発揮しつつ、既存の枠組みとは異なる方法でくらしのための交通を創出するアプローチを検討する。

例：香川県三豊市における検討内容

市域ほぼ全域に地場の路線バス事業者が存在せず、近年高まる観光ニーズへの対応や生活交通に大きな課題。

現在

父母ヶ浜の観光活性化に伴うサービス導入

「行きたいときに 行きたいところへ 行けるまち」を掲げ、住民のくらしを豊かにするため、「ちょい乗り」サービスを地元企業で「共創」して支える仕組みづくりを図り、実証実験をスタート。

■ 父母ヶ浜

潮が引いた干潮時の夕暮れには、南米ボリビアの「ウユニ塩湖」のような写真が撮れると話題の新たな観光地



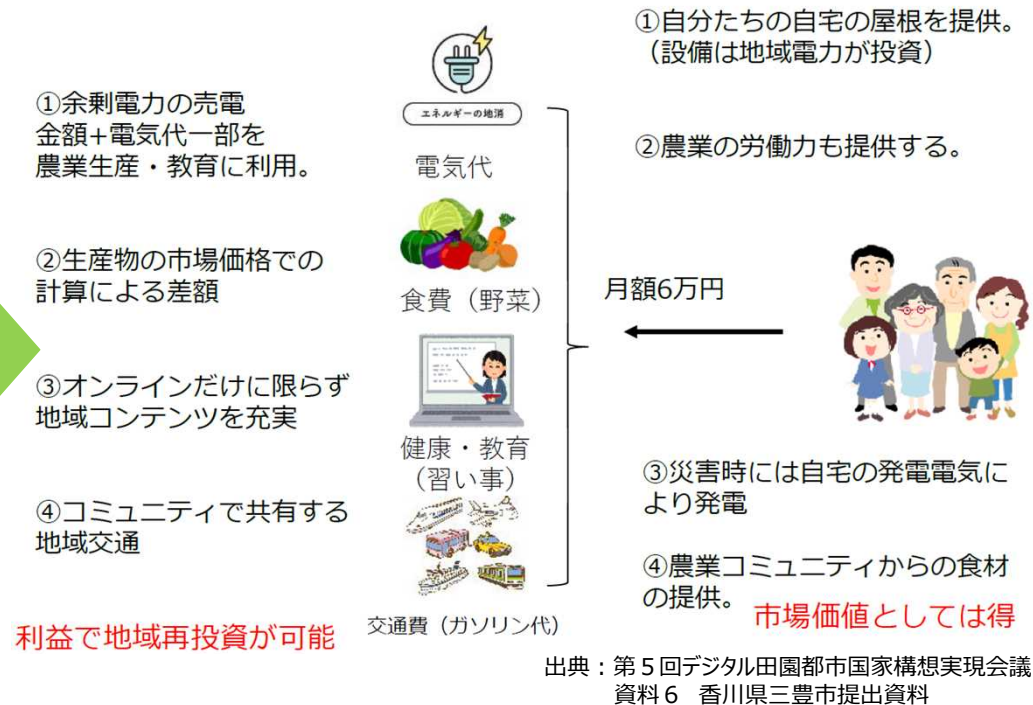
出典：三豊市HP

観光振興をきっかけとして、周囲にはカフェなどの出店が相次ぎ、移住、ワーケーションが進展

地域の生活・観光のための移動手段の確保が大きな課題に地域に根付いた「ここにはないものは自分たちで創り出す」という精神で、様々な産業の地元企業が共同で移動サービスを企画、誘客を促進

三豊市の目指す姿

ミニマムグリッドモデル



地域のくらしに必要なベーシックインフラを一括で提供
利益を地域に還元